

＜書 評＞

H. Hecaen, G. Lantéri-Laura 著

浜中淑彦・大東祥孝 共訳

大脳局在論の成立と展開

笹沼澄子（東京都老人総合研究所部長）

本書は H. Hecaen と G. Lantéri-Laura による *Evolution des connaissances et des doctrines sur les localisations cérébrales* (1977) の全訳である。大脳局在論は、リハビリテーションの諸領域においても最近したいに関心を集めつつある神経心理学の中心的なテーマの1つであり、その起源と発展の経緯を描いた本書が訳出されたことの意義は極めて大きいといえよう。

著者の一人である故 Hécaen 教授は、今世紀における神経心理学の先導的役割を担ってこられた研究者の一人であり、示唆に富む重要な研究論文ならびに著書を多数発表されてきた。はからずも、本年6月8日、突然他界されたことは返す返すも残念なことであり、いまさらのごとくこの先達の足跡の偉大さを痛感するのである。

内容は6つのセクションから構成されている。先ず、大脳局在論の起源を Smith のパピルスにさかのぼり、古代ギリシヤ、中世、ルネサンスと辿る第Ⅰ部。第Ⅱ部の Gall と骨相学が大脳局在論の成立に果たした役割の重要性についての評価に続いて、第Ⅲ部では Gall から Broca に至るまでの実験的研究、解剖学、組織学、解剖―臨床的研究の推移が分析されている。次いで第Ⅳ部では、Broca, Meynert, Fritsch と Hitzig、英国の Jackson と Ferrier など大脳局在概念の創始者たちの諸研究についての検討が行われ、第Ⅴ部では、局在論の黄金時代を形成する生理学的、臨床解剖学的諸研究と共に局在論に対する反撥の台頭の経緯が記述されている。そして、最後の第Ⅵ部では反局在論者／全体論者 (Marie, von Monakow, Head,

Goldstein, Poppelreuter, Stein, von Weizsäcker, Lashley, Pavlov など) の諸理論と業績が吟味・検討されると共に、執拗に存続する局在論者 (Henschen, Kleist, Nielsen および C. et O. Vogt) の主張が整理されている。

巻末の185の引用文献からも明らかのように、原典からの多数の引用が本書全体にちりばめられており、本書の価値を一層貴重なものになっている。さらに、訳者解説として本書の著者についての懇切な紹介があるのみならず、本書に登場する174名にのぼる研究者たちの人名録が訳者らによって用意されている。本書を手にする者にとってまことに有難い行き届いた配慮といえよう。

著者の緒言の冒頭にあるアリストテレスからの引用句をまつまでもなく、《物事をその起源から発展して行く様を見る人こそ、最もよく物事を見る》ことになろう。大脳局在論の起源と発展を辿るこの壮大な絵巻きの魅力を多数の読者が味われることをおすすめしたい。

(A 5, 頁292, 1983, ¥4,000, 千300, 医学書院 刊)